

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 28 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22520333

研究課題名（和文） 死後出版小説の問題点と編集の正当性-プルーストの場合

研究課題名（英文） Problems of roman published after death of author and legitimacy of edition - Proust's case

研究代表者

徳田 陽彦（TOKUDA HARUHIKO）

早稲田大学・政治経済学術院・教授

研究者番号：40126602

研究成果の概要（和文）：

N・モーリヤックが発見し出版したプルーストの小説『失われた時を求めて』第六巻『消え去ったアルベルチヌ』のタイプ原稿は、氏が主張するように「最終決定稿」ではなく、当初は雑誌「レーズーヴル。リーブル」用の抜粋であったということの傍証として、件のタイプ原稿では削除された、ヴェネチアで展開される「忘却」の掛替のない重要性を考察した。それをパリ第 III 大学での講演と二篇の論文で表した。

研究成果の概要（英文）：

The typed manuscript of the sixth volume “Alberitine disparue” in Proust’s roman “A la recherche du temps predu”, discovered and published by N.Maruric, is considered by her self as “last and definitive editon”. But I proposed that it was a selection destined to the revue “Les Oeuvres libres”. In my process of corroborations, this time, I examined the irreplaceable importance of the theme “oubli” evolved in the chapter of Venice, which was eliminated in that manuscript. I presented this point of vue in the lecture at University of Paris III, and published two papers.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010 年度	900,000	270,000	1,170,000
2011 年度	600,000	180,000	780,000
2012 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	2,000,000	600,000	2,600,000

研究分野：仏文学

科研費の分科・細目：人文科学部門

細目番号：3103

細目名：ヨーロッパ文学

キーワード：仏文学・仏語圏文学

キーワード：

- (1) プルースト
- (2) 物語構造
- (3) 死後出版小説
- (4) 忘却
- (5) 無意志的記憶
- (6) アルベルチヌ
- (7) ヴェネチア滞在の章
- (8) ルネッサンス絵画

## 1. 研究開始当初の背景

フランスでは、Mauriac の仮説を支持する研究者たちと、それを否定もしくはそれに批判的な研究者たちと別れているが、批判者といえども、氏の主張を正面から批判することはなかなかできない状況がある。以上のことであっても、フランスでは数人の研究者、日本では、多くの研究者が筆者の仮説を支持してくれている。筆者は、1987 年からすでに、このタイプ原稿は当初「レ・ズーヴル・リーブル」誌にあてた抜粋であるという仮説を日本語の論文で発表した。90 年には、Jean Milly 教授との討論会でこの仮説をフランス語で公表し、91 年にはフランス語論文で主張を明確な形で発表した。フランス国内で、この新資料が“抜粋”であるという仮説がより公に提出されたのは、イタリア・ローマ大学の Giovanni Macchia 教授が 93 年にフランスで翻訳出版“L’ange de la nuit” (Gallimard, 1993) されてからである。以後、「ル・モンド」紙上等でいくつか論争が交わされた。しかし双方とも決定的な論拠を提出できないで今日に至っているのが現状である。筆者はマッキア教授より 4 年早く仮説を発表していたが、残念ながら、日本語で発表していたため、マッキア教授がこの説の代表者となった形で受け止められている。しかし筆者のフランス語論文発表以降、筆者の名は、Robert Macchia 各教授らとともに、Milly 教授が編集した第 6 巻 *Albertine disparue* (Champion 刊) で“レ・ズーヴル・リーブル派”と紹介されている。2003 年 9 月京大主催の国際シンポジウムで、この問題を「忘却」のテーマの観点から論じた“L’oubli chez Proust : faudrait-il oublier l’oubli ?” (09 年度フランスで刊行)、単に“最終校”か“抜粋”かの問題を超えて、「忘却」と「無意志的記憶」がこの第 6 巻でプルーストの思想内で有機的に関係づけられたために、「忘却」が存在しないモーリアック版第 6 巻は物語上不可能であると結論づけた点、パリ第 3 大学の Robert 教授、CNRS の Brun 氏から大いなる賛同を得た。イタリアの Mondori 版翻訳

の注釈者の A.B. Anguissola 教授、D. Galateria 助教授は、このタイプ原稿を雑誌「レ・ズーヴル・リーブル」向けの抜粋と注釈で主張している。2004 年 3 月、ローマ大学で筆者の講演の際、両氏は筆者の仮説に興味深く反応し、それを支持してくれた。要するに、筆者の仮説の公的に表明できる賛同者はフランスの一部とイタリア・日本の多くの研究者である。

## 2. 研究の目的

作家の死後に出版された優れた小説は古今東西、数多くあるが、プルーストの場合はきわめて問題点が多い。『失われた時を求めて』全 7 巻のうち、とりわけ第 6 巻『消え去ったアルベルチヌ』はタイプ原稿の形で残されていた。ところが、1987 年に N. モーリアックは第 6 巻の新たなタイプ原稿を発見し、物語上の重要なテーマである「忘却」の結論とイタリア滞在時のプルーストの美術思想が展開される「ヴェネチア滞在」が欠落するこの原稿を“最終・決定稿”と主張して、第 6 巻として出版した。筆者は直後にこの原稿は雑誌に掲載予定していた抜粋であるとの仮説をたてて発表した。今回は物語構造と美術思想の観点から、自説の正当性を証明するための考察を行うことであった。

## 3. 研究の方法

筆者の仮説を証明する一番有効な方法は、プルーストが雑誌「レ・ズーヴル・リーブル」の編集長デュヴェルノワ宛にだした書簡を見つけることである。ただしいままでまたこれ以後も、この種の書簡は発見されないであろう。したがって研究方法は、仮説を傍証するという形でしかおこなえない。筆者がすでに取組み、また将来も取組む予定の方法は以下のとおりである。

- (1) N. モーリアックの説に反対する、プルーストが雑誌「レ・ズーヴル・リーブル」に

わたすべく意図のもとに作成した抜粋であるという仮説をたてた筆者は、そこには、この巻の重要なテーマである忘却のエピソードをふくむ第3章「ヴェネチア滞在」と女主人公アルベルチーナにかんするページがすべて削除されている事実を焦点をあてる。まず国立図書館で作者が同誌に掲載した同様の二編の抜粋とタイプ原稿の比較検討を削除方法の同一性という観点から行い、あわせて同誌に掲載された作者の友人たちの掲載方法も検討する。

(2) またプルーストのイタリア絵画にかんする見方の独自性を実際現地に赴き考察して、「ヴェネチア滞在」の章が小説には不可欠であることを証明する。最後に筆者の仮説を支持する研究者に以上の観点からもたらされるであろう考察をさまざまな形で検討していただき、さらに研究をすすめる。

(3) 『失われた時を求めて』のみならず、プルーストの初期作品・草稿帖をふくめた全作品から、「忘却」と「無意志的記憶」の関連性を考察する。とりわけ、モーリアック版タイプ原稿では削除されてしまっている「忘却」の最終段階（第三段階）の形成過程をさまざまなレベルで検討する。

(4) 現在進行中の研究方法であるが、まずプルーストがどのようにして「忘却」のテーマを発見し、それを13年秋にすでに出版された第一巻『スワン家のほう』以降の続巻にいかなる方法で組込まれていったかを考察する。また「忘却」のテーマとしての発見をアゴスティネリとの関係以外でも、書簡等の資料を通じて検討したい。

(5) 現行版の範囲内で、「忘却」のテーマが物語構造上いかに枢要なものであるかを再検討し、もしそれが存在しない物語（削除版のように）であれば、どのような変容をこの小説にもたらせ得るのかを考察する。同時に、現行の「忘却」の第一・第二段階における叙述の詳細な再検討も必要であろう。

#### 4. 研究成果

23年10月から24年10月まで1年間は、早稲田大学とパリ大学交換研究員としてパリに滞在して研究を遂行していた時期と重なる。23年度末（24年3月）にパリ第3大学で“L'oubli dans l'oeuvre de Proust et sa vie”と題して2時間にわたって講演をおこなった。その際、質疑応答時間が1時間あり、会場からさまざまな質問・意見がでた。『失われた時を求めて』の第六巻で繰り上げられる「忘却」の諸段階の分析と、とりわけ筆者の仮説であるヴェネチア滞在における最終段階での「忘却」テーマの4つクライテリアのうちの la mort du moi とプルーストが「忘

却」のテーマを発見した証左として筆者があげた1914年10月のアーン宛書簡にかんすることであった。前者の問題：たしかに la mort du moi はいくつも文脈でみられる概念であるが、こと「忘却」にかんしては14年5月のアゴスティネリの死後導入され、19年出版の『花咲く乙女のかげに』の『忘却』のテーマを展開する文脈なかで理論概念として開陳された。後者の問題：アゴスティネリの死後、公刊されているあらゆるプルーストの書簡を調査したが、14年10月のアーン宛で鮮明に「忘却」のテーマ発見を示唆している。それはもちろん既存の物語に「アルベルチーナ」を創造・導入したことと軌を一にしている。筆者の「忘却」にかんする発表は、間接的にN. モーリアックの仮説に反論する論拠であるから、それを支持する研究者からは「立場が違う」と質問等はでなかった。筆者はこの講演会形式の発表を変え、24年12月発行の早稲田大学政治経済学部の「教養諸学研究」第132・33合併号に“L'oubli dans l'oeuvre de Proust et sa vie”と題して発表した。死後出版小説は数多くの課題をふくんでいる。これからも取組んでいくつもりである。

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計2件）

(1)

徳田陽彦

“La position ambiguë de la seconde étape de l'oubli d'Albertine disparue chez Proust”（原文フランス語）

早稲田大学政治経済学部「教養諸学研究」（査読有）、第130号、2011年3月、pp. 67-81.

(2)

徳田陽彦

“L'oubli dans l'oeuvre de Proust et sa vie”（原文フランス語）

早稲田大学政治経済学部「教養諸学研究」（査読有）、第132・33合併号、2012年12月、pp. 101-120..

〔学会発表〕（計0件）

〔図書〕（計0件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

徳田 陽彦 (TOKUDA HARUHIKO)  
早稲田大学・政治経済学術院・教授

研究者番号：40126602

### (2) 研究分担者

( )

研究者番号：

### (3) 連携研究者

( )

研究者番号：